

つながり合い、ともに学び合う子の育成
—対話を大切にした算数科の授業を通して—

一色小学校 和泉 秀典

1 主題設定の理由

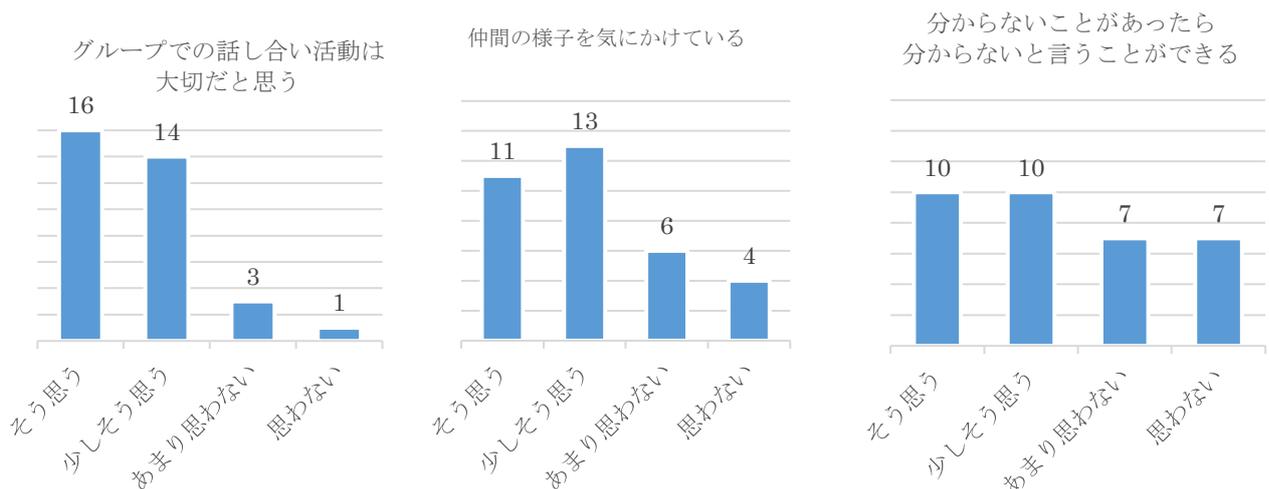
これから子どもたちが歩む未来は、あらゆるものが急激に変化していく時代だと言われている。多様な価値観が世の中にあふれ、何が本当に正しいのか、その答えが一つに定まらない時代を迎えようとしている。そんな時代だからこそ、他者とのコミュニケーション、つまり「対話」が重要な役割をもってくるのではないだろうか。教師から聞いた答えをそのまま鵜呑みにしたり、自分一人で勝手に答えを決めつけたりするのではなく、他者との「対話」を通して、答えを探し求める力こそがこれからの時代を生き抜く子どもたちに必要な力になってくるのではないかと考える。

平成30年度改訂の新学習指導要領でも、児童が「あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越えて」いくことが大切であるとされている。「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が強く示されており、「対話」の重要性が明記されている。

市内の小中学校でも、教師が一方向的に知識を教える一斉型の授業を見直し、「学び合う学び」による授業実践を長期にわたり、全市的に行っている。しかし、これまで自分が担任をしていた学級において、自分の考えを上手に友達に伝えることができず、学びが十分に深まっていなかったり、独りよがりな形式的な話し合い活動になったりしている児童の姿が多く見られた。これまでも、話し合い活動の時間を意識的に多くとるようにしてきたが、自分の考えに対して十分に自信をもつことができず、友達になかなか伝えることができない児童や、勉強が得意で、答えが分かっても、自分が問題を解けていることに満足してしまい、グループの友達の考えをしっかりと聞こうとしない児童もいた。

対話に関するアンケートを学級の児童にとったところ以下のような結果となった。

【資料1 対話に対する事前アンケート調査結果】



「グループでの話し合い活動は、大切だと思う」という項目に対して、34名中、30名の児童が、「そう思う」「少しそう思う」と答え、話し合い活動が大切であると感じている児童が多いことが分かった。しかし、「仲間の様子を気にかけている」と「分からないことがあったら分からないと言うことができる」の項目に対しては、肯定的な回答が少なかった。つまり、友達と話し合うこと自体は大切であると分かっているが、しっかりと自分の意見を言ったり、仲間の様子を気にかけたりすることができておらず、自分が分からないときに分からないということができていない実態が明らかになった。

形だけの話し合いではなく、その先に、「確かな学び」を獲得できるような対話、そして、対話を通して友達とつながりを感じ、互いに学び合っていけるような授業を展開していきたい。対話を通して、答えを探し求める中で他者とつながってほしいとの願いを込め、研究主題を「つながり合い、ともに学び合う子の育成 ―対話を大切にした算数科の授業を通して―」と設定した。なお、本研究は新型コロナウイルス感染症拡大前に実践したものである。

2 研究の構想

(1) 目指す児童像

- 友達の意見を聞いたり、自分の意見を伝えたりしながら、互いの意見を尊重し合うことができる子
- 友達と考えを交流する中で、自分の考えを深めていくことができる子

(2) 研究の仮説

研究の仮説を以下のように設定した。

- 算数科の授業において、以下の2点から効果的な対話が生まれれば、互いの意見を認め、尊重し合い、自らの考えを深められる児童が育つであろう。
- ① 対話を生み出す子どもの意識づくり
 - ② 対話する必要性を生み出す課題の工夫

※ 本研究における「対話」とは、自分本意に意見を伝え合うことではなく、友達と互いの意見を聴き合ったり伝え合ったりする相互の活動により、自分の考えを深めていけるような話し合い活動のことを指す。

(3) 研究の手だて

手だて① 対話を生み出す子どもの意識づくり

学ぶ主体は、児童である。児童の意識が変わらなければ、どんなに教師が手だてを講じたとしても、効果的な対話は生まれまいであろう。まずは、児童自身が対話することの大切さを意識できるようにさせたいと考えた。また、日頃から対話する意味を意識できるようにしたり、授業で振り返りをしたりすることが大切であると考え、以下の方法を考えた。

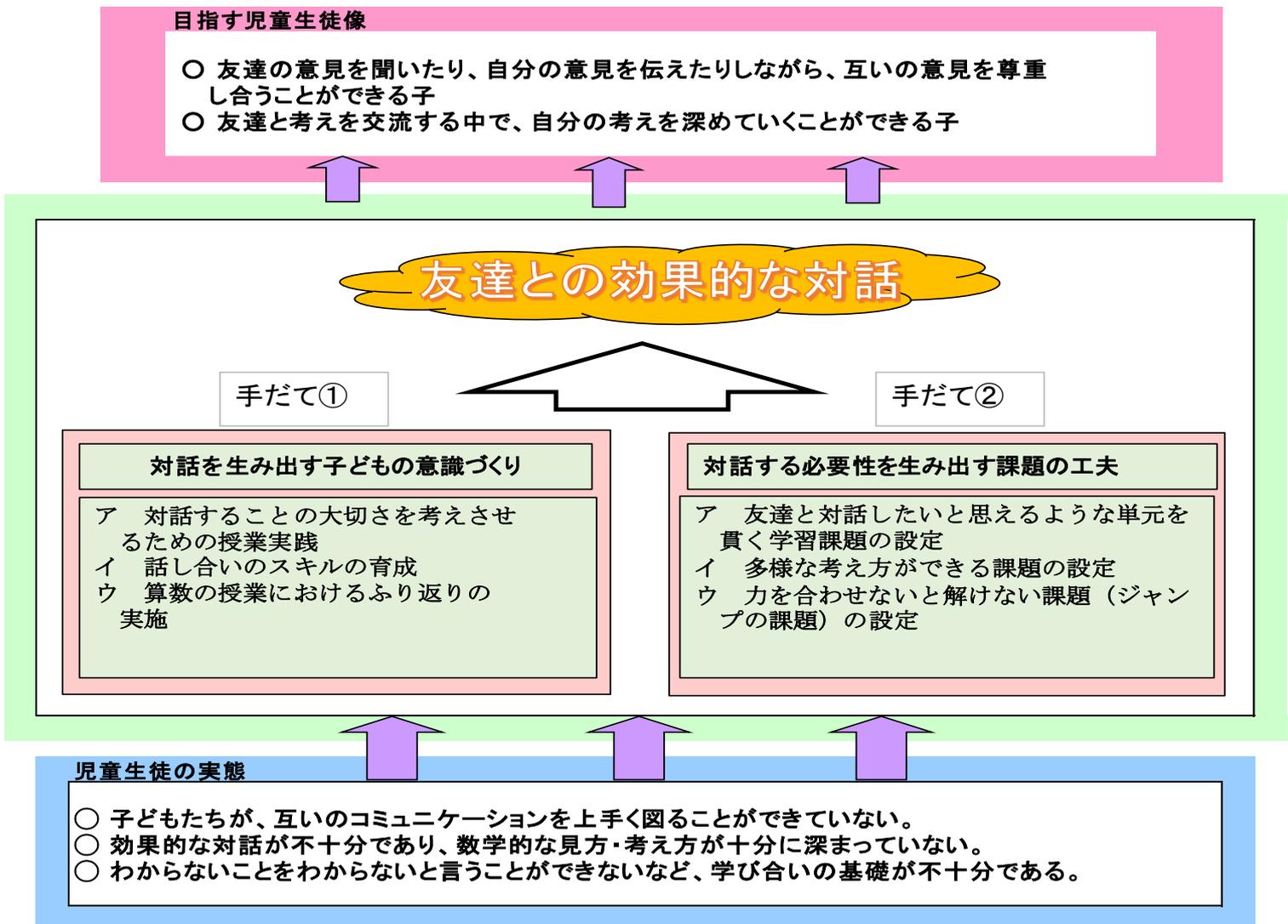
- ア 対話することの大切さを考えさせるための授業実践
- イ よりよい対話を生み出すための話し合いのスキルの育成
- ウ 算数科の授業におけるふり返りの実施

手だて② 対話する必要性を生み出す課題の工夫

教師が、課題を工夫すれば、児童は関心をもって友達との効果的な対話を行い、自分の考えをより深めていくことができるであろう。そのためには、友達と対話をしたいと思えるような課題の工夫が必要であると考えた。よい課題の提示が、よい対話を生み出すということである。対話を生み出すことができるようにするために、具体的に以下の課題の工夫を考えた。

- ア 友達と対話したいと思えるような単元を貫く学習課題の設定
- イ 多様な考え方ができる課題の設定
- ウ 力を合わせないと解けない課題（ジャンプの課題）の設定

(4) 研究構想図



本研究では児童Aと児童Bを主な抽出児として変容を追うことで、手だての検証をしていく。

〈児童A〉外国にルーツをもつ児童である。日本語をうまく話すことができず、消極的でグループの話し合いに、ほとんど参加できない。算数科の授業でも、理解していないことが多く、意欲的に課題を解決しようという意識があまり感じられない。児童Aが興味をもち、他者と関わることで、少しでも学習に興味をもつことを期待したいと考えた。

〈児童B〉児童Aと違って理解力はあるが、あまり他者と関わろうとしない児童である。グループでの話し合いの際にも、自分が問題を解けても、友達のことには無関心で他者と話そうとしない児童である。児童Bが友達と関わり、多様な考え方を認めながら、対話することで学びを深めてほしいと考えた。

3 研究の実践と考察

(1) 対話を生み出す子どもの意識づくり

対話することの大切さを考えさせるための授業実践 (手だて①ア)

これからの社会は、ますます他者とのコミュニケーション能力が求められる時代である。教師が、児童に対話することを期待しても、児童自身が対話の重要性を感じなければ、自ら進んで対話しないのではないかと考えた。そこで、まずは児童が「対話すること」の大切さを感じられるようにしたいと思い、対話の重要性を児童自身に考えさせる授業を行った。

授業の導入では、「どうして、学校に来てみんなで一緒に勉強をしているのだろう」と尋ねた。児童の中には、「みんなと一緒に勉強した方がいい」「一人だと、先生や友達に教えてもらえない」などという考えが出てきた。一方で、児童Bなどから「別に学校なんか来んでもいい。」という意見も出てきた。理由は、自宅でもタブレット端末で学習できたり、自分の興味のある勉強が好きな時間に好きなだけできたりするからというものであった。児童Bのように、学校ではなく自宅で勉強した方がよいと考える児童が数名いた。多くの児童は、学校でみんなと勉強した方がよいと思っている様子であったが、理由はうまく説明することができなかった。何となく学校でみんな一緒に勉強することは大切であると思っているものの、なぜそれが大切なのかは分かっていないのであろう。

次に、経団連が出している「企業が人材に求める力・能力のアンケート結果」では、企業が、どのような力をもつ人を求めているのかを児童に考えさせた。すると、子どもたちからは、「頭がいい人」「勉強できる人」、「人をまとめたりできる人」「リーダーシップじゃない?」「英語ができること!」など、とても多くの意見が出てきた。しかし、今出た意見の中には、一位の力は全く入っていないことを教師が伝えると、児童は非常に驚き、どのよ

【資料2 企業が求める力・能力アンケート】

1位	コミュニケーション能力	87.0%
2位	主体性	63.8%
3位	協調性	49.1%
4位	チャレンジ精神	46.0%
5位	誠実性	43.8%
6位	ストレス耐性	35.5%
7位	責任感	24.2%
8位	論理性	23.6%
9位	課題解決能力	19.7%
10位	リーダーシップ	16.6%

こんな「力」が求められている!
経団連 企業アンケート

うな力が求められているのかをととても知りたがった。1位が「コミュニケーション能力」であることを知ると、こちらが予想した以上に、「えー!？」と、とても驚いている児童が多かった。そして、アンケートを見てどう思ったかをグループで意見交流させたところ、児童Bのグループでは、次のような対話が行われた。

【資料3 B児のグループでの対話記録】

問いかけ①

- T : このアンケートを見てみてどう思ったか、グループで交流してみて。
- C2 : コミュニケーションって何？
- C1 : 上手に、人と話ができることじゃない？学校で先生とか友達と話したりすること。
- 児童B : 何で、コミュニケーションが1位？大切なの？
- C1 : 仕事って一人でするんじゃないかってみんなでするでしょ。だから、人と話したりすることが大切なんじゃない。
- C2 : だから、それ(コミュニケーション)が大切か。

問いかけ②

- T : コミュニケーションの力を付けるためにはどうしたらいい？
- C2 : 授業のときにグループでしっかりと話し合いする。
- T : 話し合いしたら何がいいの。
- C1 : ちゃんと相手の話を聞いたり、自分の意見を言ったりするでしょ。そうしたらコミュニケーションの力がつくと思う。
- 児童B : そっか。

これまで、児童Bは自分が問題を解くことが一番大切だと考え、人と考えを交流することをほとんど重視していなかった。しかし、この授業がおわる頃には、少しずつ児童Bの意識が変わり始めているように感じた。また、授業のふり返りを書かせたところ、多くの児童が「コミュニケーションの力」をきたえることが大切だということが心に残った、という声が多く聞かれた。

児童Bのふり返りから

話し合いは、めんどくさいと思っていたけど、アンケートで、コミュニケーションの力が大切ということがわかった。これから、話し合いをしっかりと、自分の意見を言ったりしようと思った。

話し合いのスキルの育成 (手だて①イ)

対話することの大切さを考えさせるための授業実践を行ったが、次に、どうすれば話し合いが上手く進むようになるのかを児童と一緒に考え、それを教室に掲示した。

これまで、話し合いのルールや型を決めつけすぎると、そのことを意識しすぎるあまり、学びが深まるような自由な対話を妨げる要因になってしまうのではないかと考えてきた。しかし、実際には、児童に自由に任せっきりにしてしまうと、学びが十分に深まるような話し合いが行われず、自分勝手に話をする児童の姿が多く見られた。まだ小学生である児童には、しっかりと話し合いのルール、話し合いの型を教えていくべきだと考えるように

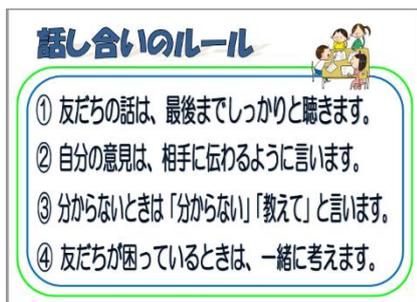
なった。

そこで、まずは学校統一の話し合いのルールがあったため、それをクラスに合ったものに改訂し、学級にも掲示した。【資料4】児童も、当たり前のこととして捉えていたため、しっかりとルールを守るように児童と約束をした。

また、対話においては、「聴くこと」が大切であるとよく言われる。小学校高学年で必修となった外国語の授業において、聞き手の反応が大切であると実感した出来事があった。外国語の授業でSMALL TALKの活動があり、英語をまだ十分に話すことができない児童にとって、英語で会話することは難しいと感じていた。実際にやってみると、初めは上手く会話を楽しむことができなかった。しかし、会話するとき、聞き手がしっかりと反応【資料5】することを教えただけで、格段に、話し手が楽しそうに、生き生きと英語を使って話し始めたのである。

児童もこの経験から、日本語の話し合いの場面でも同様に、聞くことが大切であることを体感できたように感じた。そして、具体的に「どうやってやったの?」や「〇〇ってどういうこと?」「そういうことか。」など、相手が話すことに対して、しっかりと反応することを掲示物として貼り、児童に意識させることとした。【資料6】

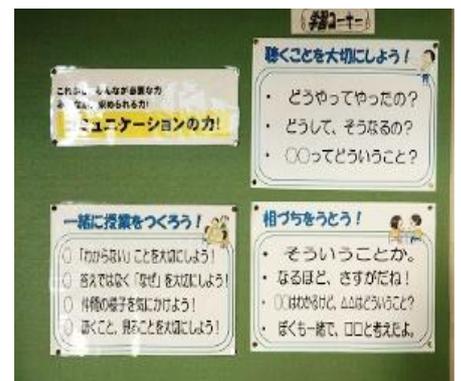
【資料4 話し合いのルール】



【資料5 SMALL TALK の Reaction】



【資料6 対話のための掲示物】



また、「わからない」ことの大切さや、答えではなく、「なぜ」を大切にしていこうなど、学び合いでこれまでも大切にしてきたことを、改めて児童と一緒に確認した。そして、それらを掲示物として貼ることで、児童が話し合いでの意識が高まってきたようにも感じた。さらに、指導をする際にも、「しっかりと聞くようにしなさい」という曖昧な指示ではなく、より具体的でわかりやすい指示を児童にできるように自分自身も感じるようになってきた。

算数の授業におけるふり返りの実施 (手だて① ウ)

授業において児童に対話できたどうかを意識させるために、授業のおわりにふり返りを行った。ふり返りを通して、話し合いのスキル (手だて①イ) をより強く児童に意識させ

るようにするためである。

「わからないときに、わからないと言うことができた」「答えでなく、なぜを大切にすることができた」

「仲間の様子を気にかけることができた」など、対話をできるだけ意識させるような項目とした。

継続的にふり返りを行うことで、児童の対話に対する意識も強くなってきたように感じた。

【資料7 ふり返りシート】

算数	わからないときに、わからないと言うことができた。	答えでなく、「なぜ」を大切にすることができた。	仲間の様子を気にかけることができた。	今日学んだことや経験の振り返り
1月14日	① できた ② 少しできた ③ あまりできなかった ④ できなかった	1 できた ② 少しできた ③ あまりできなかった ④ できなかった	1 できた ② 少しできた ③ あまりできなかった ④ できなかった	30分後、おつかい係を交代
1月15日	① できた ② 少しできた ③ あまりできなかった ④ できなかった	1 できた ② 少しできた ③ あまりできなかった ④ できなかった	① できた ② 少しできた ③ あまりできなかった ④ できなかった	鉛筆のふりかきで「話し合い」ができた。 このふりかきで、おつかい係を交代した。
1月16日	① できた ② 少しできた ③ あまりできなかった ④ できなかった	① できた ② 少しできた ③ あまりできなかった ④ できなかった	① できた ② 少しできた ③ あまりできなかった ④ できなかった	今日は、おつかい係を交代して、おつかい係を交代した。おつかい係を交代して、おつかい係を交代した。
1月17日	1 できた ② 少しできた ③ あまりできなかった ④ できなかった	1 できた ② 少しできた ③ あまりできなかった ④ できなかった	① できた ② 少しできた ③ あまりできなかった ④ できなかった	今日、おつかい係を交代して、おつかい係を交代した。おつかい係を交代して、おつかい係を交代した。

(2) 対話する必要性を生み出す課題の工夫 (手だて②)

児童の対話に対する意識が高まっても、やはり何より大切なのは授業そのものであることに疑いの余地はない。授業が魅力的なものでなければ、本当の意味において、質の高い対話は生まれまいだろう。そこで面積（5年算数科）の単元において対話を意識した授業実践を行った。

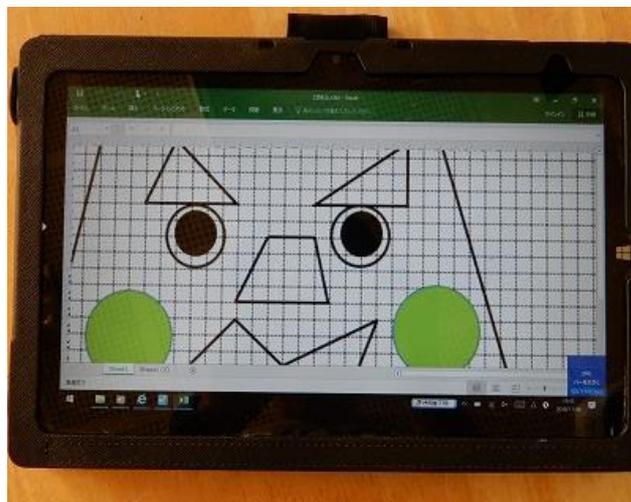
友達と対話したいと思えるような単元を貫く学習課題の提示 (手だて②ア)

本単元では、直角三角形・三角形・平行四辺形・台形・ひし形等の図形の面積の公式を理解し、公式を使って面積を求めることができることをねらいとしている。しかし、単に教師が提示した図形の面積を求めさせるだけでは、児童の興味、関心を十分に引き出すことができないのではないかと考えた。

そこで、児童にとって身近な小牧市のマスコットキャラクターである「こまき山」の顔のパーツをさまざまな図形を組み合わせて作成し、単元を通してその面積を求めていくことにした。そうすることで、児童が意欲的に課題に取り組めるのではないかと考えたためである。眉を三角形や直角三角形にしたり、鼻を台形にしたりしながら、本単元で学ぶ全ての図形を取り入れることを意識して、表計算ソフトで「こまき山」を作成した。【資料8】

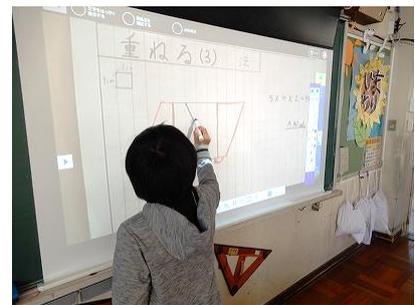
【資料8 図形を組み合わせた問題】

本単元の導入の時間に、児童に作成したキャラクターを見せたところ、子どもたちは、「あ～、こまき山だ」「似てない!」「何か形がたくさんある」など、非常に興味をもって教材を見ていた。普段の授業では発言が少ない児童Aも、「給食で使うやつ(皿)にかいてある」などと発言する姿が見られ、興味を持っているようであった。次に、「こまき山」には、どのような形があるのかをグループで考えさせ「正方形」「長方形」「三角形」「台形」「平行四辺形」「ひし形」に分類させた。



その後、「こまき山の顔のパーツ（図形）で一番大きいものってどこだと思う？」という発問を投げかけ、児童に予想させた。児童は、マス目の数を数えたり見た目の大きさを比べたりしながら、どの図形が一番大きいのか一生懸命考えようとする姿が見られた。児童Aも、予想を立てていた。いろいろな顔のパーツの面積を正確に求めていくことを伝えたところ、「解いてみたい」との声が多く聞かれた。普段、関心を示すことが少ない児童Aからも「やってみたい！」という声を聞くことができた。ほとんど全ての児童が興味をもって課題を考えようとする姿が見られ、単元を貫く学習課題として、児童に提示することができた。

また、本単元では積極的に ICT 機器の活用を行った。活用したい資料や問題をタブレット端末で表示し、それをプロジェクターで大きく映した。タブレット端末では、児童に見せたいところを自由に大きくすることができる。本単元では、授業ごとに考えさせたい図形が異なっているが、ICT 機器を利用することで、着目させたい図形を大きく写し、児童に提示することができた。大きくするというだけで、児童は、どこに着目すればよいかのすがすがしに理解できる。さらに、スクリーンに自由に書き込んだり消したりすることができたため、児童の意見をそのまま書き込むことができる。算数における図形の問題と ICT 機器は、非常に相性がよいと感じた。



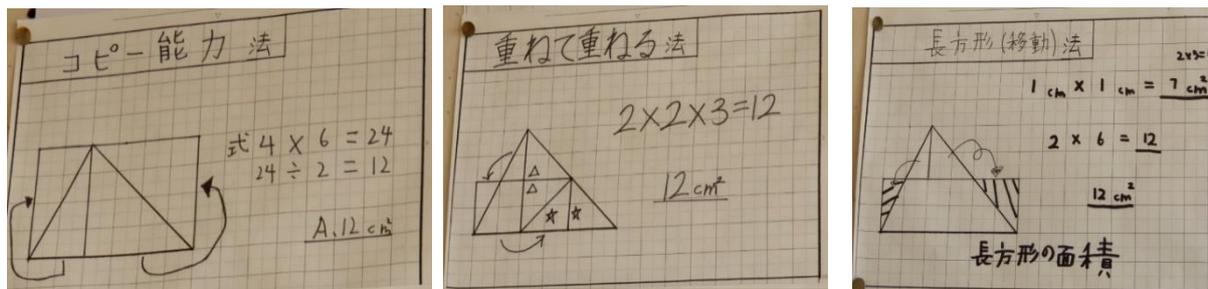
【写真1】 ICT機器を活用する児童

多様な考え方ができる課題の設定（手だて②イ）

本単元では、三角形や平行四辺形等のいろいろな図形の面積を求めることをねらいとするが、これらの面積をただ単に求めるために形式的に公式を覚えて、問題を解くのではなく、図形の一部を移動させて既習の図形に変形させたり、既習の図形に分割したりする算数的な活動を取り入れるようにした。多様な考え方ができるため、グループで意見交流する中で、友達の意見を聞いて自分が気付かなかった新たな考え方に気付いたり、自分の考えを友達に伝えたりする中で、自分の考えを深めたりしてほしいと考えたためである。また、答えが同じ場合でも、どのように解くかでそれぞれの考え方は異なるだろう。自分が考えつかなかった方法を知ること、他者の考えを聞くことの価値を分かってもらいたいと考えた。

実際の授業では、「こまき山」の顔のパーツの一部分（三角形などの図形）が入ったワークシートを児童に配り、その図形の面積の求め方を既習の学習内容を使って考えさせた。その際、補助線を引いて図形を分解したり移動したりしてもよいことを児童に伝えた。また、自分が考えた面積の求め方に、名前をつけさせることで、自分の考えに愛着をもたせた。名前をつけることで、より自分の意見として相手に伝えたいという思いをもったからである。児童は、こちらが考える以上に、いろいろな解き方で考えていた。

【資料9 三角形の面積のいろいろな求め方】



三角形の面積を求める授業では、三角形の一部を移動させて、長方形の面積として求めたり、大きな長方形の半分の面積として考えたりしていた。中には、「重ねて重ねる法」のように、教師である私自身も思いつかなかったような意見まで出てきた。授業をしていて、思わず教師も児童の意見に真剣に耳を傾けたいくなるような場面も多くあった。

児童Aの様子を観察すると、初めはどのようにやれば良いのか分かっていないようであった。話し合いの時間にも、児童Aは進んで発言することはなかったが、グループの友達の様子を見たり、説明を聞いたりすることで、どのように解いていけば良いのか理解したようであった。

【資料10 児童Aのグループの対話記録と児童Aのふり返り】

- C5 : Aくん、わかる？
 児童A : ここをくるりんって動かすでしょ。そしたら、長方形になるでしょ。だから12になった。
 C6 :すごい！できたね。
 A児 : (少し嬉しそうな様子)

グループでいど「まき山」
 でてきたのよかった。
 自分の考えをいえてうれしい。

上記は、「ひし形」の面積を求める際の児童Aのグループの話し合いの様子である。この対話記録を見てみると、「Aくん、わかる？」とC5が、問いかけている。児童Aが自分の意見を言えるようになったのは、自身の意識の高まりもあるが、多くの児童が対話する意識が高まったことで友達の様子を気にかけることができるようになってきたことも大きな要因ではないだろうか。児童Aも、振り返りに「自分の考えをいえてうれしい」と書くなど、少しずつ自分の意見を言うことに対して自信がついてきたようである。常に目に付くところに話し合いの掲示物を貼ったり、毎時間のふり返りをしたりすることで、授業においてしっかりと話し合いをすることで、学習内容も身につけることができたと考えることができる。また、これまで自分が問題を解くことができても、それを意欲的に友だちに伝えたり、友だちの意見を積極的に聞こうとしなかったりした児童



【写真2】 クラスの掲示物

Bにも少しずつ変化が見られるようになってきた。

【資料 1 1 B 児のグループでの対話記録】

T : どうやって三角形の面積を求めたか、グループで交流してみて。
C 1 : どうやった？
C 2 : おれ、「コピー能力法」。まず三角形を二つに分けるでしょ。
それを上にもってきたら、長方形ができるでしょ。
その半分だから、式は、 $4 \times 6 = 24$ 半分で $24 \div 2 = 12$ で 12 になる。
B 児 : いっしょや。
B 児 : 上のところを下にもってきて、たてが 2 センチで横が 6 センチの長方形として考えてもできるやんね。
C 3 : わたしも、それ。

児童 B は、三角形の面積を、2 つの直角三角形に分けてそれぞれの面積を求めたり、変形したりして、面積を求めていた。普段なら、問題を解き終わるとあまり他の友達と話をしない児童 B であるが、4 人グループの話し合いの際に、自分の考えを他のみんなに伝えている姿が見られた。しかも、自分からしゃべり始めるのではなく、グループの友達の意見を聞いてから、自分の意見を話すことができた。答えが一つではなく、多様な考え方ができる課題だったため、友達の意見を聞いたり、自分の考えを伝えたりする中で、自然な対話が生まれてきたのであろう。また、別のグループで出た意見を聞いた後で、児童 B の様子を観察してみると、次のような話し合いも見られた。

【資料 1 2 B 児のグループの対話記録と B 児のふり返り】

C 1 : さっき、T くん (別グループ) が言ってた
「重ねる法」って分かった？
C 2 : ここの部分とここの部分を重ねるでしょ。だから
 2×3 で 6 が 2 つ分で 12 になるってこと。
B 児 : それ、おれもすごいって思った。だって、そんな
んわからんやん、普通。さすが T や。

T くんのお重ねる法の考え方がすごいと思った。
グループで話し合えた。

児童 B が自分では考えつかなかった意見を、素直に自分の中に取り入れることができるようになっていくことが分かる。正解だけにこだわって、ほとんど友達の意見を聞こうとしなかった以前の児童 B には、見られなかった姿である。自分の考えとは異なる多様な考え方ができる課題ということで、児童 B も他者の意見を聞こうという気持ちが生まれ、学びを深める対話につながったのではないかと考えられる。

Ⅲ 力を合わせないと解けない課題(ジャンプの課題)の設定 (手だて②ウ)

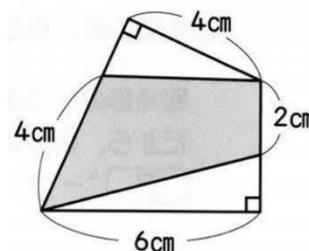
さらに発展問題として、グループの友達と力を合わせないと解けない問題(ジャンプの課題)に取り組んだ。本時は、教科書にも載っていない問題を児童に提示した。

課題を提示した瞬間、「かんたん!」と言っていた数名の児童も、ワークシートを配布する頃には、じっと問題をみて、一生懸命に考えようとする姿が見られた。

算数が得意な児童からも、「え～、どうやってやるの?」という声が聞かれた。これまでとは異なる課題に子どもたちは興味をもっているようであった。教科書にも載っていない問題であり、これが解けると算数の教科書を作れるよ、などと言ったところ、何とか解いてみたいと必死になって課題に向かっていた。

グループの隊形で問題を解いていたが、全員の児童がしゃべらずに課題に取り組んでいた。児童Aなど学力が低い児童も、真剣に取り組んでいたことが印象に残った。多くの児童が簡単に解けてしまった状況では、自信がなくなり、解こうという気持ちもなくなってしまうが、ほとんどの児童が解けていない状況の中では、自分も頑張ってみようという意識が働いているように感じた。

しばらくした後、グループでの話し合いが少しずつ始まった。



【資料13 ジャンプの課題】

【資料14 児童Bのグループの対話記録】

- 児童B : わかった!! (問題を解き始める。
: 教えよっか?
C1C2 : (そろって) やめて。待って、待って。
~ しばらく問題を解く ~
C1 : やっぱわからんから教えて。
児童B : OK。ここに線を引くでしょ。そうしたら三角形が二つでこっちの三角形は、底辺が4センチ。
C1 : 高さは? あっそうか。前にやったやつと一緒にやん。
児童B : そう、高さが外にある三角形でしょ。だから、高さも4センチなる。
C1 : ちょっと待って。ってことは、もう一つの三角形も.....

この難しい課題でも、児童Bは解くことができていた。その児童Bが「教えよっか。」と問いかけたことに対して、C1とC2は「やめて」と言い、自分から問題に意欲的に取り組もうとする姿が見られた。これまでの授業では、問題が解けること、答えがわかることが大切だと多くの児童が考えていたが、「わからない」ということを児童たちも楽しめるようになってきているように感じた。

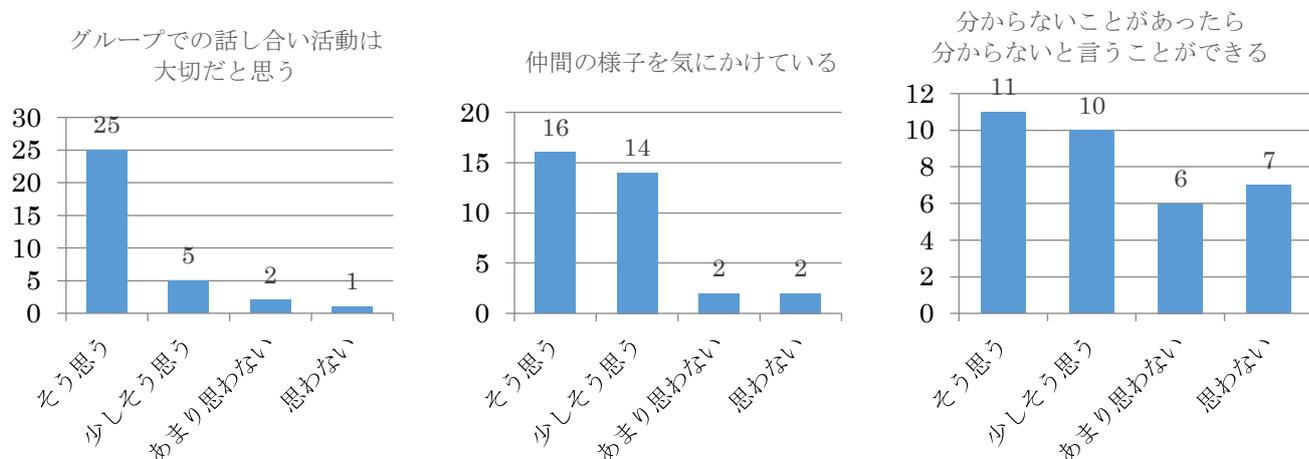
解けそうで解けない課題は、わからなさを楽しむことができる。そういった課題は、児童はとても主体的に取り組めるようになっていくように感じた。

4 研究の成果

(ア) 手だて①について

実践後、児童に前回と同じ項目のアンケートをとったところ以下のような結果となった。

【資料 15 対話に対するアンケート調査結果 (研究実践後)】



「グループでの話し合い活動は、大切だと思う」という項目に対して、実践前は、16名の児童が「そう思う」と答えていたのに対し、実践後は25名の児童が「そう思う」と答えた。また、「仲間の様子を気にかけている」という項目も、肯定的に答えた児童が24名から30名に増えている。対話の重要性を考えさせる授業実践(手だて①ア)をすることで、話し合いの大切さを感じたり、仲間の様子を気にかけたりすることができるようになってきたのであろう。

まずは児童が「対話すること」の大切さを感じられるようにさせたいとの思いから、対話の重要性を児童自身に考えさせる授業を行った。(手だて①ア) その結果、児童の対話に対する意識が変わった。「○○ってどうやってやるの?」「なんでそうやって考えた?」など、自然に相手に尋ねるような言葉が教室に増えてきた。また、対話の重要性を意識できるように掲示物を工夫したり(手だて①イ)、振り返りの実施(手だて①ウ)をしたりすることで、児童の対話に対する意識が変化してきた。「対話の必要性を生み出す意識づくり」が、児童が効果的な対話をすることにつながっていくことに有効であったと言えるだろう。

(イ) 手だて②について

実践前には、意欲的に課題に取り組むことができなかった児童Aが、「こまき山の鼻(台形)の求め方が分かったよ。」などと言いながら進んで問題を解き、友達に自分の考えを伝えようとする姿が見られた。こまき山という児童にとって身近なキャラクターを使うことで友達と協働したいと思える課題(手だて②ア)となり、対話に結び付いたのであろう。

また、児童Bも意欲的に周囲と関わったり、周囲の意見を認めたりしようという意識が、感じられるようになってきた。

児童の身近な存在であるこまき山のキャラクターを取り入れたことで、子どもたちは、意欲をもち、様々な図形の面積を解いていた。(手だて②ア)児童Aも少しずつ課題と向き合い、自分の考えを言えるようになってきた。また、友達と積極的に関わろうとしなかった児童Bも、グループでの話し合いに参加するようになってきた。対話する必要性を生み出す課題の工夫(手だて②イ)が、児童Bの学びを深める対話につながったと考えられる。



【写真3】 ジャンプの課題を解く児童

さらには、力を合わせないと解けない課題(手だて②ウ)を提示することで、児童が頭を寄せ合い協力して解決しようという姿勢が感じられた。対話する必要性を生み出す課題の工夫をすることが、友達との効果的な対話につながっていくことに有効であったと言えるだろう。

5 今後の課題

実践前に比べ、多くの児童が友達の意見を聞いたり、自分の意見を伝えたりしながら学びを深めることができるようになってきた。しかし、アンケートからも分かるように、分からないことがあったときに素直に分からないと言うことができる児童がまだまだ少ないことや、課題に興味をもてないときには、他者と積極的に関わろうとしない児童が見受けられることが今後の課題である。また、今回の実践において児童が対話する様子を観察してきたが、児童に基礎的な学力がしっかりついていない(学びの基礎ができていない)児童にとって、他者と効果的に対話するのは難しいと感じた。対話を重視した授業を今後も実践していきながらも、基本的なことを十分理解していない児童に対しては、学びの基礎となる基礎学力をしっかりとつけていきたい。

これから子どもたちが歩む未来は、あらゆるものが急激に変化していく時代だと言われている。今回の新型コロナウイルス感染症の問題でも、私たち大人もその問題にどのように対処していけばよいのか、はっきりとした「正解」を見出すことはできなかった。多様な価値観が世の中にあふれ、何が本当に正しいのか、その答えが一つに定まらない時代を迎えている。そんな時代だからこそ、対話がますます重要な役割をもってくるのではないだろうか。対話を通して、迅速に答えを探し求める力こそがこれからの時代を生き抜く子どもたちに必要な力になってくるだろう。

感染症拡大防止策やICT機器の導入により、対話の形が大きく変化しようとしている。しかし、そこでも対話の重要性を疑う余地はない。今後も、子どもたちが、互いに関わりをもち、友達と意見を出し合う中で、自らの学びを深めていけるような授業を、私自身も仲間と対話しながら、追求し続けていきたい。

〈参考文献〉

「対話」で学ぶ算数科授業（2018）
小学校学習指導要領　　〈平成29年告示〉

滝ヶ平 悠史 著 明治図書
文部科学省